

令和6年度技術情報第25号（トマトのタバコナジラミの殺虫効果試験）について

トマトのタバコナジラミに対する主要農薬の殺虫効果試験について、下記のとおり取りまとめましたので、周知およびご指導をよろしくお願いいたします。

なお、本情報は病害虫防除所ホームページ（<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>）にも掲載しています。



令和6年度 技術情報第25号

本年は、トマトでタバコナジラミの発生程度は低いものの、多くのほ場で発生しています。また、本虫は黄化葉巻病ウイルス（TYLCV）を媒介することから、防除の徹底が必要です。トマトの主要農薬について本虫に対する殺虫効果試験を行いましたので、防除指導の参考にしてください。

- 対象作物 トマト
- 対象病害虫 タバコナジラミ（バイオタイプQ）
- 供試虫 霧島市で採集した個体群（霧島個体群），さつま町で採集した個体群（さつま個体群）の3齢幼虫および成虫
- 殺虫効果試験の結果と注意事項

1) 試験結果

- 3齢幼虫では、霧島個体群とさつま個体群の両方で死亡率80%以上となった農薬は、アファーム乳剤とコロマイト乳剤であった（表1）。
- 成虫では、1剤を除き死亡率は80%未満であり、効果の高い農薬が少ない（表1）。
- 以上のことから、幼虫期の防除を徹底する。

2) 注意事項

- 供試した農薬はトマトに登録（令和6年12月25日現在）があり、使用前には必ずラベル等を確認し、使用基準を遵守する。
- ほ場の農薬散布状況によって殺虫効果は異なることが予想される。散布後は防除効果を確認する。
- マルハナバチ等を利用している場合は、農薬の選定に注意すると共に、散布時は巣箱を施設外に持ち出す。

表1 トマトのタバコナジラミ(バイオタイプQ)の成幼虫に対する各種農薬の殺虫効果(2024年)

農薬名	農薬		マルハナバチへの影響 <sup>2)</sup>	タバコナジラミへの影響 <sup>3)</sup>	殺虫効果 <sup>1)</sup>			
	IRACコード	希釈倍数			霧島個体群		さつま個体群	
					3齢幼虫 <sup>a)</sup>	成虫 <sup>c)</sup>	3齢幼虫 <sup>b)</sup>	成虫 <sup>c)</sup>
アファーム乳剤	6	2,000	2日	強い	◎	△	◎	×
ウララDF	29	2,000	0日	なし	△	△	×	×
グレーシア乳剤	30	2,000	1日	強い	◎	×	△	×
コルト顆粒水和剤	9B	4,000	3～7日	強い	○	△ <sup>5)</sup>	△	○ <sup>5)</sup>
コロマイト乳剤	6	1,500	1日	小さい	◎	×	◎	×
トランスフォームフロアブル	4C	1,000	2～5日	中程度	△	△	×	×
ファインセーブフロアブル (アベンジャーフロアブル)	34	1,000	1日	1日 <sup>4)</sup>	◎	○	△	◎
ベストガード水溶剤	4A	1,000	10日以上	強い	○	○	△	×
ベネビアOD	28	2,000	1日	なし	◎	×	△	×

1)殺虫効果:幼虫は処理12日後、成虫は処理48時間後の補正死亡率を、×:0～30%未満、△:30～60%未満、○:60～80%未満、◎:80%以上で示す

2)マルハナバチに対する影響を認めなくなるまでの日数。アリスタライフサイエンス株式会社「天敵等への殺虫・殺ダニ剤の影響表 第35版」を引用

3)愛媛県「農作物病害虫等防除指針【参考資料】(令和6年)」および農研機構「施設キュウリとトマトにおけるIPMのためのタバコナジラミ利用技術マニュアル(2015年版)」を元に作成

4)タバコナジラミに対する影響を認めなくなるまでの日数

5)生存しているが落下を繰り返した個体は苦悶虫(死亡虫)として判別

6)試験方法

供試虫:収穫末期のトマトほ場から採集。4月18日に霧島市国分で、4月11日にさつま町時吉で採集し、累代飼育した個体

検定日:a)7月26日～8月5日、b)7月19日～7月31日、c)9月30日～10月2日

検定法:徳丸(2013)の方法に準じ、キャベツ葉で実施

展着剤:ベタリンA 5,000倍を加用

補正死亡率:3反復の死亡率の平均値を用いて、{(処理区死亡率－無処理死亡率)/(100－無処理死亡率)}×100で算出